

第54回 ネコの内蔵型肥満細胞腫について

ネコの内蔵型肥満細胞腫について

今回はネコの内臓に発生する肥満細胞腫についてです。

- ・好発部位；脾臓と腸管
- ・罹患したネコの平均年齢・・・脾臓；10歳齢、腸；13歳齢（イヌと異なり、ネコの内蔵型肥満細胞腫では、皮膚肥満細胞腫が過去に存在したり、同時に発生することは少ない。）
- ・病因；不明。シャム猫系の品種に罹患率が高く、遺伝的素因も示唆されている。
- ・腫瘍細胞の脱顆粒（ヘパリンやヒスタミン）に伴う合併症は、イヌと同様ネコでも知られている（凝固障害、消化管潰瘍、アナフィラキシー様反応等）。
- ・ネコ内蔵型肥満細胞腫では広範囲な播種・転移が多く認められている。転移病変は

脾臓型（30頭の剖検データ）・・・肝臓；90%、腹腔内リンパ節；73%、骨髄；40%、肺；20%、腸；17%、（肥満細胞血症は症例の40%にみられた）

（肉眼的には大部分がび漫性の脾臓腫大型、比較的少数の結節型に分類される）

腸型（具体的なデータなし）・・・一般的に広範囲な播種が起こり予後は不良（診断確定後、短期間で死亡もしくは安楽死）。

（十二指腸、空腸、回腸での頻度は同程度、結腸では15%未満、肥満細胞血症は稀）

- ・播種した内蔵型肥満細胞腫の症状
 - a) 抑うつ、食欲不振、体重減少、間欠的嘔吐、脾腫、腹水貯留、（腸型では血便（ないこともあり）、下痢、発熱等も）
 - b) 消化管潰瘍やコントロールできない出血、平滑筋緊張度の低下、低血圧性ショック、努力性呼吸
- ※bは脱顆粒に伴う血管作用性物質の放出によるとされている

・診断
CBC、バフィーコート塗抹、骨髄吸引、凝固系検査、血清化学検査が有用（脾臓型では罹患ネコの約半数でバフィーコートに肥満細胞が検出、凝固系では90%に異常あり）

・ 予後

脾臓型 . . . 骨髄と末梢血に多数の腫瘍細胞が出現しても脾摘後には良好なQOLを保った長期生存 (生存期間中央値 ; 12 - 19ヶ月)

(食欲不振、著しい体重減少、オスであることは負の予後因子となる)

腸型 上記参照

・ 治療

プレドニゾロン、ビンクリスチン、シクロフォスファミド、メトトレキサートを含むさまざまな化学療法プロトコールが試みられているが、生存期間延長にはつながっていない。

パソラボ